



▲現役部員(2003年)



▲SALON DE KONAN No.3 (1965年)



▲1960年代活動風景

文化会 美術部

キャンパスを超え、表現の場を求めた50年

終戦の混乱が落ち着き、多くの人々が海外文化に目を向けた。50年代、日本の美術界においての気は、具象画から抽象画へ向かった。こうした日本美術史の変革期、新制甲南大学の開学とともに、旧制甲南高等学校の文化部絵画班を前身とする美術部がスタートした。

57年卒の渡部さんは、旧制での絆を生かして、仲間と美術を楽しめる場をつくりたかった。と、発足当時を思い返す。部員数は15名ほど。甲南学園展を皮切りに、大学祭の看板やオブジェを一手に制作し、年に2、3回のスケッチ会を開催。さらに個々に美術館や芸術館巡りをして、関西展などに出席する部員もいた。55年には、学習院大学との合同展を開催。これが後に東京の百貨店での合同展に発展し、活動の幅を広げるきっかけになった。「あの頃は演劇部との共同部室で、体育会との予算の取り合いも厳しかった」。59年卒の天野さんは不便を強いられながらも、ピカソ展やマチス展に衝撃を受け、創作意欲を強くした当時の心境を語ってくれた。

58年の秋には、神戸国際会館での文化部合同の文化祭に参加。音楽や能・狂言が披露される中、美術部は驚きのパフォーマンスを見せる。3000人を数える満員の観客を前に、即興で又ードデザインをやったのだ。そこには描くだけではない、新たな表現を求める姿勢があった。「ソノボリ集団とみなされることもあった」と語るのは、67年卒の柳原さん。あまりに活動の幅が広いので、クラシック音楽が好きだからなど、美術とは無縁の入り理由も多かったとか。定期展「サロン・ド・コナン」の「こくく、多彩な顔ぶれに彩られたサロンの様相である。しかしながら、美術が世間に浸透し始めた63年頃からは絵画作品の創作により情熱的な活動が始まる。柳

た。当時のシンドルスの上位に進むと、必ず甲南同士の対戦になったほどだ。彼らが王座奪還というひとつの目標を前に、ガッツリと手を組んだのだ。そして、79年。甲南は当時関東で無敵の強さを誇った早稲田大学を下し、16年ぶり、2度目の日本一に返り咲いた。その強さは、いまなお、テニス部の語りぐさとなっている。しかし、残念ながらこの栄光は永く続かない。

81年以降からは、突然のテニスブームでジュニアプレイヤーが増加。有力校のほとんどがセレクト制を導入したが、甲南はあくまで純血にこだわった。86年卒の坂元さんによると部員が減少し、団体戦では一部リーグ優勝を逃す不本意な成績が続いたという。ただし、この頃でもインカレや関西学生選手権ではコンスタントに優勝者を輩出していった。86年には初の関西学生リーグ2部陥落するも、2年で1部復帰を果たした。88年卒の石原さんは、個人戦でいくつもの良い成績でも部員全員が目撃はついに王座奪還にありつくと当時を振り返る。

92年卒の平野さんたちは、崖っぷちに立ちながら、1部を死守する粘りを見せた。その裏にあっては練習の厳しさだけではない。「甲南庭球部をいかに守り抜くか。部員全員が集まって、大まじめにそんなことを語り合っていたんですよ」。そして94年には久々の王座出場を果たし、4位の成績を収める。99年卒の国光さんは、あまりにハードな練習で、退部を考える暇もなかったと笑うが、逃げ出さなかったのは、きっと大きな目標を誰も見据えていたからだろう。

OBの方々のたゆまない努力に支えられてきた甲南硬式庭球部の伝統。現役の池上さん、高木さん、田中さんは、あらためてその重さを感じ、表情を引き締めた。先輩たちが築いた伝統を受け継ぐ彼らの健闘を見守り続けていきたい。

原さん自身、現代アメリカ絵画展で衝撃を受け制作意欲をかき立てられた。全関西学生美術連盟に「甲南あり」と言われたのはこの頃だ。一方で、神戸東公園園の大屋外展や、神戸国際会館でパフォーマンス(舞台芸術行為)を披露。異端ぶりも健在だった。

70年代に入ると美術部人気は高まる。部員数は50名程度に膨れ、定例活動の他に、アニメーションや演劇バンド活動にも取り組むなど、マルチな芸術家集団の様相を極める。76年卒の日浦さんは、部員18人が個々に、ヘア板2枚をキャンパスにして描いた作品、計36枚を張り合わせた合作を京都市立美術館に出展しました。美術館始まって以来の大きさと驚かれたのは忘れられないと、梓にとらわれない当時の表現意欲の高さを語る。が、その気もやがて影をひそめる。

「私たちの頃は、部員数が半減。3年次に神戸ユニバーシアードで併設された世界学生美術展に参加したが、それ以外は定例のものに止まりました」と87年卒の黒田さん。指導者不在で文化会からの降格のピンチにも陥ったという。

15年の時が流れ、現在、部長を務める伏原さんはこう語る。「今では、画廊を借りなくても甲友会館が自由に利用できるなど、発表の場が整っています。コンテ、エタグラフィックを用いた精度の高い作品を手掛けるなど、趣味の域を超えてのめり込む部員が増えてきました」と再びの充実ぶりを語った。あくまで個が主体の美術部だが、彼らの言葉を聞く限り、そこにも受け継がれる精神がある。それは、美術を楽しむという心。技術や形式ではなく、そのひとつの想いに美術部の歴史が紡がれてきたのだ。



美術部結成。小野先生を中心に。(1953年5月)

デビスカップ日本代表選手

選手名	出場年度
旧制高 51年卒 伊藤 英吉	1933
大学 57年卒 松岡 功	1956
高校 55年卒 石黒 修	1958, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66
大学 52年卒 藤井 道雄	1932, 63, 64, 65
大学 54年卒 渡辺 康二	1963, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70
大学 55年卒 小林 功	1967, 68, 69, 70
大学 64年卒 河盛 純造	1968, 69, 70, 71
高校 73年卒 西尾 茂之	1977, 78, 80, 81, 82, 83, 84



全日本大学対抗テニス王座決定戦(1963年7月・芦屋クラブ)

体育会 硬式庭球部

80周年記念式典 11月27日開催!
場所: 阪急インターナショナルホテル

運命づけられた試練 王座のプレッシャーと闘う



全日本大学対抗テニス王座決定戦優勝記念皿(1963年)

硬式庭球部の歴史は、旧制甲南高校が生まれた大正時代にまで遡る。創部2年目には関西学生連盟リーグ戦で初勝利を挙げ、早々と、後の硬式庭球の名門校としての礎を定めた。新制甲南大学となって以降、男子テニスの国対抗戦「デビスカップ」の出場選手を数多く輩出する別表(など)着実に「テニス甲南」の名声を広めていった。

55年、関西大学対抗リーグA級に昇格。3年後に新設された女子部も、その翌年には、関西女子大学リーグB級で優勝し、男女共にA級昇格を果たした。59年にキャンペンとしてこの強豪チームを引っ張った那須さんは、当時をこう振り返る。「僕は相当メンバーに嫌われたんじゃないかな。キツイ練習ばかり課していたから。日曜日も自主練習だったけれど、休まなかった。池田市のコートに集まり、関学や神大といった他校と競い合っていましたね。続く時代を担った西尾さんも、誰もが全国制覇を目指し、昼休みみまでランニングしていました」という。この厳しい努力が彼らの実力をさらに押し上げる。全日本大学対抗テニス王座決定戦において強豪・慶応大学との接戦を制し、念願の全国王座を手に入れた。

70年代前後は団体戦で関西チャンピオンを死守しながら個人戦においても多くのインカレ優勝者を輩出した。初心者同然で入部した部員が4年次にインカレ出場を果たしたのも他校にない高いモチベーションがなした業と言えよう。そんな一人、71年卒の藤井さんは、初心者同然で半ば騙されたようなカタチで入部したが、本当に貴重な時間を過ごせた」と当時を振り返る。78年に全国制覇を逃した吉田さんは、その悔しさを胸に王座奪還を固く決意。また下級生にも強力なメンバーがそろった。シングルスで2年連続全日本学生生のタイトルをものにした中西さん

た。当時のシンドルスの上位に進むと、必ず甲南同士の対戦になったほどだ。彼らが王座奪還というひとつの目標を前に、ガッツリと手を組んだのだ。そして、79年。甲南は当時関東で無敵の強さを誇った早稲田大学を下し、16年ぶり、2度目の日本一に返り咲いた。その強さは、いまなお、テニス部の語りぐさとなっている。しかし、残念ながらこの栄光は永く続かない。

81年以降からは、突然のテニスブームでジュニアプレイヤーが増加。有力校のほとんどがセレクト制を導入したが、甲南はあくまで純血にこだわった。86年卒の坂元さんによると部員が減少し、団体戦では一部リーグ優勝を逃す不本意な成績が続いたという。ただし、この頃でもインカレや関西学生選手権ではコンスタントに優勝者を輩出していった。86年には初の関西学生リーグ2部陥落するも、2年で1部復帰を果たした。88年卒の石原さんは、個人戦でいくつもの良い成績でも部員全員が目撃はついに王座奪還にありつくと当時を振り返る。

92年卒の平野さんたちは、崖っぷちに立ちながら、1部を死守する粘りを見せた。その裏にあっては練習の厳しさだけではない。「甲南庭球部をいかに守り抜くか。部員全員が集まって、大まじめにそんなことを語り合っていたんですよ」。そして94年には久々の王座出場を果たし、4位の成績を収める。99年卒の国光さんは、あまりにハードな練習で、退部を考える暇もなかったと笑うが、逃げ出さなかったのは、きっと大きな目標を誰も見据えていたからだろう。

OBの方々のたゆまない努力に支えられてきた甲南硬式庭球部の伝統。現役の池上さん、高木さん、田中さんは、あらためてその重さを感じ、表情を引き締めた。先輩たちが築いた伝統を受け継ぐ彼らの健闘を見守り続けていきたい。

【創部】1952年
【部員数】42名(2004年1月現在)
【主な実績】

1955	インカレMS優勝(松岡功)ノMD準優勝
1956	インカレMD優勝(松岡功・小林要)
1957	インカレMD優勝(高石勝(守田真明))
1959	インカレMD準優勝
1960	インカレMS準優勝
1961	インカレMD優勝(藤井道雄・平野一高)ノインカレWD優勝(村上登美子・木村洋子)
1962	インカレWD優勝(村上登美子・木村洋子)
1963	全日本大学対抗テニス王座決定戦優勝(甲南5・藤井道雄)ノインカレMS優勝(渡辺康二)ノインカレMD優勝(渡辺康二・小林功)ノインカレWD準優勝
1964	インカレWD準優勝
1965	全日本大学対抗テニス王座決定戦準優勝
1966	全日本大学対抗テニス王座決定戦準優勝
1967	全日本大学対抗テニス王座決定戦準優勝ノインカレ室内MS優勝(辻本康)ノインカレ室内MD準優勝ノインカレMS優勝(中西伊知郎)ノインカレMD優勝(吉田昇生・中西伊知郎)ノインカレ室内MS優勝(吉田昇生)ノインカレ室内MD優勝(吉田昇生・中西伊知郎)
1978	全日本大学対抗テニス王座決定戦準優勝ノ全日本室内選手権MD準優勝ノインカレ室内MD優勝(吉田昇生・中西伊知郎)
1979	全日本大学対抗テニス王座決定戦優勝(甲南5・早稲田4)ノインカレMS優勝(中西伊知郎)ノインカレMD優勝(中西伊知郎・江見洋平)ノインカレ室内MD優勝(中西伊知郎・藤原純)
1980	全日本大学対抗テニス王座決定戦準優勝ノインカレMS準優勝ノインカレ室内MS準優勝
1981	インカレ室内MS準優勝
1982	インカレMD準優勝
1984	インカレMD優勝(前田健志・坂元俊)ノインカレMD準優勝
1984	全日本大学対抗テニス王座決定戦4位
1994	取材に出席された方ノ那須一郎さん(59歳卒)ノ西尾忠房さん(65歳卒)ノ藤井道雄さん(70年卒)ノ吉田昇生さん(79年卒)ノ中西伊知郎さん(81年卒)ノ坂元俊さん(86年卒)ノ石原さん(88年卒)ノ平野雄さん(92年卒)ノ国光高木さん(99年卒)ノ学生ノ池上真治さん(3ノ高木隆宏さん(文)ノ田中幸子さん(文)ノ丸尾記子さん(理)ノ

上記年表は優勝・準優勝のみ記載。表記については、インカレ：全日本学生選手権大会、インカレ室内：全日本学生室内選手権大会、MS：男子シングルス、MD：男子ダブルス、WD：女子ダブルス

【創部】1952年
【部員数】42名(2004年1月現在)
【主な実績】

1952	美術部創部
1953	10月、関西学生芸術展出品(渡部清水(文))
1954	学内展はじめて(第一回部展)
1955	大学祭において正門前に大学祭のためのコメント制作。以降、大学祭の正門アーチとなり制作を繰り返す。
1955	第一回学習院合同展開催(於・朝日会館)ノ新入生歓迎展発表
1957	第一回神戸七大学美術連合展開催
1958	全日本学生芸術シンポジウム(関西)ノ井・金田(入賞)ノ、オル甲南展開催ノ、サロン・ド・コナン展開催
1966	野外展開催
1994	ユニバーシアード制作

取材に出席された方ノ渡部隆夫さん(57歳卒)ノ天野吉則さん(59歳卒)ノ柳原秀行さん(67文卒)ノ日浦恵造さん(76年理卒)ノ黒田大作さん(87法卒)ノ学生ノ伏原裕一さん(文)ノ佐伯裕美さん(文)ノ中東由樹さん(理)ノ丸尾記子さん(理)ノ

03年 大学祭の正門アーチ作り

95年 大学祭の正門アーチ作り

54年 大学祭の朝

2003 全部員による共同作品制作